

20.6.25 Yahoo News で COVID-19 と ME/CFS

6月10日(水)に Bloomberg TV (アメリカで1994年に開局)から、「いつまでも続く COVID-19 の症状」と題するニュースが放送され、25日に Yahoo News でも取り上げられました。COVID-19 後もブレイン・フォグ (頭の中に霧がかかったようで働かない)、慢性疲労、体調不良、リンパ節の腫れなどの ME/CFS を思い起こさせる症状がいつまでも続くといえます。

米国国立衛生研究所 (NIH)におけるウイルス感染後疲労症候群の包括的研究の主任研究者であるアビンドラ・ナス先生は語ります。

「私達は長い間、COVID-19 には一度かかればそれで終わりだと思っていたのですが、そうではありませんでした。今では何千という患者が、症状が持続するという現実を訴えています。熱は下がり、咳などの他の症状は治っても、今度は他の症状が出てきます。よく見られる症状は、ブレイン・フォグ、慢性疲労、体調不良、リンパ節の腫れ等のようで、これらの症状は私達が ME/CFS と呼んでいる病気を思い起こさせます。それは驚くようなことではなく、多くのウイルス感染がこの病気に関連しているからです。」

字幕【COVID-19 は、脳卒中や脳内出血などを含む、他のもっと稀な合併症とも関連しているかもしれません】

「こうした合併症は、感染後期に起きており、免疫系の関与を示唆しています。ウイルスが入り込み、免疫が過活動になり、様々なタイプの神経症状を引き起こす原因になりえます。」

字幕【ナス先生は、これらの合併症は、ウイルス感染後症候群がどのようになぜ起きるのかを知る良い機会となると語ります】

「患者を診療する時には、何に感染したのかが分からず、ウイルスも特定できない場合が多いです。どのウイルスにかかっていたかを特定するには遅すぎるのです。でも今はそれは言い訳になりません。どのウイルスが原因であるのかを正確に知っていますし、どういう症候群であるかも、その間に何が起きたのかも厳密にわかっています。これは不幸な事態だと思いますが、本当に長い間できなかったこれらの病気を理解するために、この機会を有益に使うことができます。」

字幕【米国 NIH 臨床センターのアンソニー・サルレディニ先生は、COVID-19 が心臓、肺、腎臓に与える影響を追跡する研究に取り組んでいます】

「2つの患者グループを研究します。急性の患者さん達のグループは、発症時から経過を追い、1年後の症状まで見ます。他の病院で治療を受けた患者さんのグループは、急性期後に登録し、心臓や肺、腎臓の機能についての予後を見ます。」

字幕【サルレディニ先生は、COVID-19 の様々な症状の患者の結果を比較しようとしています】

「重態の患者だけを登録するのではなく、感染した可能性のある若い人にも非常に興味があります。彼らは嗅覚や味覚を失い、熱もあって悪性のインフルエンザにかかったように感じた後、良くなります。予後はどうか、どうやって良くなったのか、同じような年代の患者で良くならずに衰弱し、集中治療室に入る患者とどこが違うのかを見ることにも非常に興味があります。」

※ヤフーニュースはこちらからご覧頂けます。

<https://news.yahoo.co.jp/articles/8c5eaddeecf1e13a68cb487a8f7bdddcccbaf773>

英語の原文画像はしばらく下記からご覧頂けます。

<https://www.bloomberg.com/news/videos/2020-06-10/the-lingering-symptoms-of-covid-19-video>

日本での COVID-19 後の不調の報道資料

20.7.10 NHK ニュース WEB に「後遺症」研究の記事

7月10日付けのNHKのニュースWEBに、「新型コロナ 後遺症の実態を研究へ 2000人対象 厚労省」と題して、厚労省が新型コロナウイルスの「後遺症」の実態を調べる研究を、来月から開始することが取り上げられました。

新型コロナウイルスの感染者は、陰性になって退院後も、数か月にわたって発熱やけん怠感が続いたり、呼吸機能や運動能力の低下で、日常生活に支障が出たりする人が多くいることが、国内外で明らかになっています。

加藤厚生労働大臣は10日の会見で、後遺症の実態を調べる研究を来月から始め、来年の3月末まで行う予定であることを明らかにし、「研究の成果は国民に情報発信していきたい」と話しています。

研究は新型コロナウイルスに感染後、陰性となったおよそ2000人を対象に行われ、重症で酸素投与が行われた20歳以上の人は呼吸機能への影響を、軽症の人は回復後に続いている症状を聞き取ります。症状が続く人の共通項目を特定し、後遺症が出やすい要因を調べ、退院後の治療や予防などに役立てます。

※下記からご覧頂けます。

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200710/k10012508211000.html>

日本での COVID-19 後の不調の報道資料

20.7.10 毎日新聞にコロナ「後遺症」研究の記事

7月10日付けの毎日新聞WEB版に、「新型コロナ『後遺症』研究へ 退院後も息苦しい、疲れやすい…厚労省、2000人対象」と題して、厚労省が新型コロナウイルスの「後遺症」の実態を調べる研究を、8月から開始することが取り上げられました。

厚生労働省は10日、新型コロナウイルス感染者で、退院後も息苦しさが続いて自宅で酸素吸入が必要だったり、疲れやすいなどの「後遺症」が続く人がいるとの報告を受け、原因を調べる研究を8月から3月末まで行うと発表しました。炎症で肺の組織が壊れるなどの原因が考えられ、原因が分かれば、治療や予防の方法を調べる方針。

研究では、症状の程度に応じて対象者2000人を二つのグループに分け、症状が重く酸素投与が必要だった20歳以上の人には退院後、残っている症状を聞き取り、肺のCTや機能を調べる検査を実施。症状が比較的軽かった人は、残っている症状の聞き取りや血液の分析を行います。

※下記から一部をご覧頂けます。

<https://mainichi.jp/articles/20200710/k00/00m/040/141000c>

20.7.9 東京新聞に新型コロナ「後遺症」の記事①

7月9日付けの東京新聞に、「新型コロナに『後遺症』か～5月から自宅療養の男性『起き上がれない日も』」と題して、新型コロナウイルスの「後遺症」について取り上げられました。新型コロナ感染者で、陰性になった後も息切れや発熱などの症状を訴えるケースが見つかり、コロナの「後遺症」が続くなら、若者も十分な注意が必要ということになり、学会は近く調査に乗り出す予定です。

新型コロナウイルスに感染し、自宅療養が続く千葉県内の十代男性は、3月末に発症し、4月1日にPCR検査で陽性と判明。約2週間の入院後、県が用意したホテルで経過観察に。5月中旬に陰性の検査結果が出て帰宅しました。

ところが、体重も落ち体調は回復しておらず、頭や胸の痛み、発熱や倦怠感がよくあり、「倦怠感がひどい日はベッドから起き上がれない」と言います。先月、検査入院し、血液検査や肺のコンピューター断層撮影（CT）で大きな異常は見つかりませんでした。当初から同じ症状が続いていることなどから「新型コロナに罹患した影響」と診断されました。

少しずつ回復しているものの、学校には4月から登校できていません。陽性だった時期の入院中の医療費などは公費で全額補助されましたが、陰性後の検査入院や通院は保険診療です。男性は「陰性になっても症状に悩まされる患者がいることをもっと知ってほしい」と語ります。

長く続く症状をネット上で訴える人も少なくありません。3月から倦怠感や腕のしびれに悩んでいる女性は6月下旬、患者やPCR検査で陽性から陰性になった人、長期にわたって症状がある人ら約400人にネットでアンケートを実施。主な症状で「微熱・倦怠感」を抱えている人が3割弱いたほか、「動悸・息苦しさ」と「胸痛・背中痛」がある人がそれぞれ2割弱いました。聖路加国際病院によると、6月5日時点で陰性が判明し退院・転院した患者67名の内、7人は筋力が低下するなど日常生活に支障がある状態でした。

日本呼吸器学会は早ければ8月にも患者の追跡調査を始める予定です。学会理事長は「呼吸器機能の低下のほかに、発熱、強い疲労感といった症状が出ると聞いており、こうした症状がどういう人にどの程度起こるのかは分かっておらず、実態を把握したい」と話します。

※記事の一部は下記からご覧頂けます。

<https://tokuho.tokyo-np.co.jp/n/nb00d80d056bb>

20.7.9 東京新聞に新型コロナ「後遺症」の記事②

7月9日付けの東京新聞に、「肺繊維症、免疫暴走などの見方も～ウイルス 臓器などに残留か」と題して、新型コロナウイルスから回復した人のうちに、呼吸器疾患などの後遺症が生じる可能性について取り上げられました。日本呼吸器学会によると、後遺症が疑われるケースは海外でも確認されており、イタリアの呼吸器学会はコロナから回復した人の3割に呼吸器疾患などの後遺症が生じる可能性を指摘。中国やフランスでは、肺から酸素を全身に供給する機能の低下が報告されています。

後遺症を含めた長期的な影響はまだ分かっていません。「コロナウイルスに特有ではないですが、肺炎には肺繊維症という後遺症があり、息切れや運動した時に呼吸が苦しいという症状が出ることもある」と国際医療福祉大のA教授は説明します。さいたま医療センターのB副センター長も肺の繊維化の可能性を指摘。肺の一番奥にある肺胞が固くなって、肺全体が広がりにくくなり、重い場合には「5年たっても肺の機能は8割しか戻らない」と言います。

肺炎が重くなると、ウイルスの増殖を抑えるために全身から白血球を呼び寄せる伝令物質「サイトカイン」が血液中に過剰に流れ、他の臓器も攻撃する「サイトカインストーム」が起きます。この他、ウイルスが血管の壁に感染して血栓ができる全身血栓症になると、多臓器不全や脳梗塞、心筋梗塞などを引き起こします。集中治療室でも入院が長引き、退院後に認知や身体機能が低下することもありますし、重症化しなかった人にも、発熱や倦怠感、味覚や嗅覚の障害などが続くケースがあります。

「はっきり分らないが、だるいのは肺の回復が遅く、酸素の取り込みが悪いからではないか。熱が続くのは鼻の奥にウイルスがおらずPCR検査で陰性になっても、臓器などにウイルスが残っているためかもしれない」とBセンター長。陰性になって退院後に医療費が一部自己負担になる点についてC医療ジャーナリストは、「コロナに限って医療費を補填するなど、何らかの救済策を取ってほしい」と提案します。

20.7.7 毎日新聞に新型コロナ「後遺症」の記事

7月7日付けの毎日新聞に、「『健康とはほど遠い』 陰性になっても続く倦怠感と嗅覚障害 新型コロナ『後遺症』」と題して、新型コロナウイルスの「後遺症」について取り上げられました。新型コロナの「後遺症」はまだ明確になっていませんが、警鐘を鳴らす学会や医師も出てきています。

千葉県男性（21）は4月1日に発症。高熱の他に下痢や嘔吐、血痰症状も加わり、近くの内科を受診し7日にPCR陽性との連絡を行けました。保健所からは「3～4日以内に入院できる」と言われましたが、入院できたのは、連絡から22日後の29日でした。CT検査を受け、肺炎と診断され、入院中には手足に湿疹も出ました。PCR検査で2回陰性判定となったため、5月9日には退院しました。

退院日にも37.5度の熱があり、退院後も発熱、倦怠感や頭痛、嗅覚障害も続き、買い物に行かずに3日連続食事できない時もありました。血液検査で脱水症状を指摘され、再入院したことも。医師から「家族の助けなしでは生活できない」と言われ、実家に戻りました。「大学では5月半ばからオンライン講義が開始されていたが、試験勉強をするなどはとても無理」と大学の休学も決めました。

実家に戻ってからも、発熱、倦怠感や頭痛、湿疹などの症状は続き、「健康とはほど遠い」といいます。近くの病院を受診しましたが痛み止めが処方されただけで、男性は「いまだ社会復帰できておらず、ずっと続く症状の原因が分からないのが怖い。陰性になっても症状が続く人がいることを知ってほしい」と話しています。

新型コロナに感染すると、全身に血栓が発生することが明らかとなっており、新型コロナの後遺症の可能性を指摘している大阪市の太融寺町谷口医院院長は、「正確な作用機序は分かっていないものの、肺から侵入したウイルスが血中に入るとさまざまな臓器の細胞の表面に発現しているACE2受容体に結合することは確実で、ACE2受容体が存在する血管内皮細胞にウイルスが侵入して起こった血管内皮細胞炎と関係があるのかもしれない」といいます。

また、「新型コロナは、血栓が身体のさまざまな組織に影響を与えること、血管内皮細胞炎が起こり全身に影響が及ぶこと、さらに、重症化すると免疫系のさまざまな物質が嵐のように吹き荒れて（サイトカインストーム）、多臓器が障害されることなどから、重症化すれば単なる風邪とはまったく異なる」と話しました。

医療法人社団広士会理事長によると、運営する東京都内のクリニックに、「37度前後の微熱がずっと続く」「胸が苦しい」「倦怠感がある」などと訴える患者が、4月から5月末までに約180人来院。うち、5人は感染確認後に陰性となった患者でした。

同理事長は、患者の75%が1カ月以上症状に悩まされていますが、病院の血液検査では異常がないことから、医師が精神的なものではないかと診断するケースがあり、「ショックを受けている患者も多く、安易に精神的なものとして医療従事者が決めつけることに警鐘を鳴らしたい」と話しています。

日本血栓止血学会は新型コロナの感染で、血管に炎症を起こし血栓症を発症する可能性を指摘しており、特に重症者で血栓症を発症する頻度が高く、全身症状を悪化させる因子となっているといいます。厚生労働省の「新型コロナウイルス感染症診療の手引き」には「後遺症」に関する記載はありませんが、同省担当者は「今後も情報収集を続け、必要であれば手引きに掲載していく」としています。

※記事の一部は下記からご覧頂けます。

<https://mainichi.jp/articles/20200707/k00/00m/040/106000c>

20.7.2 NHK ニュースで COVID-19 後の体調不良

7月2日(木)の19時と21時のNHKニュースで、「退院後もコロナ後遺症」と題して、COVID-19後の体調不良について取り上げられました。新型コロナウイルスに感染し、陰性になった後も、発熱や息苦しさが続いていると訴える人が相次いでおり、実態調査が始まることになりました。

21歳の男子大学生は、退院した後も後遺症と見られる症状を訴えています。4月に感染が判明し、40度を超える発熱などで入院。5月9日に陰性が確認されて退院しましたが、37度5分前後の発熱や、倦怠感、息切れ、嗅覚障害などの症状が2ヶ月近く続いています。今は休学を余儀なくされています。

大学生：すごい倦怠感で押しつぶされそうな感覚で、眠れないくらいの頭痛もありました。字を書くだけでも疲れる状況で、集中して聞くことは難しいと思いました。なぜ熱が出ているのか、症状がいつまで続くかが分からないので怖いと思います。

SNS上には、後遺症と見られる症状に苦しむ人達の声が相次いでいます。

声：「めまいも鳴りも治らん。本気で後遺症なのではという気がしてきた」「コロナ後遺症があります。自分も微熱が60日続いています」「医者から一生治らないかもといわれた」

NHKは、早くからこうした症状の存在に注目し、東京都内18か所の医療施設に調査を依頼。5月末までで陰性と確認されたおよそ1370人の内、少なくとも98人が、呼吸機能や運動能力の低下などで、生活に支障を抱えていることが分かりました。

後遺症と見られる症状には、医療費の負担も重くのしかかり、この大学生は今も続く症状の治療に、これまでに12万円以上かかっています。陰性と確認され退院できるまでの医療費は全額公費負担ですが、その後は通常の医療費として一部が自己負担になるからです。

後遺症と見られる症状について、日本呼吸器学会が実態調査に乗り出します。学会の医師が所属している全国の医療機関に協力を仰ぎ、肺機能の低下を中心に症例の調査や研究を進めるということで、調査は早ければ来月にも始まる見通しです。

日本呼吸器学会理事長の横山彰仁氏：日本でそのような方がどのくらいいるのか等は、全く分かっていない。どのくらいの頻度でどういう人にこういった後遺症が出るのか、早く第二波に備えて、データをきちんと整備しておくことが重要だと思います。

※詳しくは下記からご覧頂けます。

https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200702/k10012492951000.html?fbclid=IwAR0pDKhSkZJH0pLac65uhPSY8hvbF-MVFdwWABdIXNDu74RVUtezgwqi_os

20.6.24 NHK クローズアップ現代+で COVID-19 後の体調不良

6月24日(水)にNHKテレビの『クローズアップ現代+』で、「新型コロナ 元感染者たちの告白」と題して、COVID-19 後の体調不良などについて取り上げられました。

司会：日本で感染した人は18000人あまり。その多くがウイルスを克服し、回復したと言われていきます。元感染者の人たちは今どう過ごしているのか。体験談を募集（「感染者の経験を今後に生かしていくために、新型コロナウイルスに感染した方の体験、意見を募集しています」）すると、長引く体調不良に苦しんでいるとの声がいくつも寄せられました。

元感染者の声：「3月の三連休に感染し、未だに闘病中です」「微熱、頭痛、関節痛など様々な症状が1ヵ月半以上続いています」

字幕：「熱が続いています」「味覚嗅覚の異常が治らない」「コロナの後遺症に悩まされています」「職場復帰はできていません」

司会：これまであまり語られることのなかった元感染者たちの肉声。回復後どんな人生を歩んでいるのでしょうか。誰もが罹患する可能性のある新型コロナウイルス。いち早く感染を経験した人の声に耳を傾けることで、ウイルスとどう共生していくべきか考えます。

元感染者が語る悩み。1つ目は症状がなかなか治らず、体調不良が長引くケースです。4月に新型コロナウイルス感染が判明した大学生(21)。PCR検査は陰性になってから2ヶ月以上経ちますが、今も体調がすぐれないといいます。3月から自宅で自粛していましたが、アルバイトのため、一度だけ電車で外出。5日後に発熱しPCR検査で陽性となりました。

大学生(21)：37度7分あり、少し高めですね。熱があると不安な気持ちにはなります。例えるならインフルエンザの10倍以上の辛さと、肋骨が骨折したくらいもがいて、寝返るたびに激痛が胸に走って。

その後一向に熱が下がらず、手のひらには湿疹が。症状は全く改善されませんでした。1ヵ月後にPCR検査を行うと2回連続で陰性に。体内にはもうウイルスがいないと診断され退院が決定しました。

大学生(21)：体調的には全く変わらなくて、本当に陰性なのかなって疑うレベルでした。

感染から2ヶ月。発熱や頭痛や今も続いています。はっきりした原因は分かりませんが、医師の見立てでは、免疫力全体が落ちているか、長い療養生活による心因性の可能性もあるといいます。大学も休学せざるをえませんでした。

大学生(21)：コロナに感染する前は、2週間ぐらいで治る病気なのかなという認識でいましたけど。

(大学の)オンライン授業を見ることも結構きついし、それを覚えてテストするとなると、今の僕には到底できない。

検査で陰性となった後も長く続く体調不良。番組で体験談を募ったところ、同様の悩みが多く寄せられました。

元感染者の声：「私は3月上旬から現在も微熱が下がらず、全身に様々な症状が出ています。」「発症後50日経つが、味覚嗅覚の異常が治らない」

日本での COVID-19 後の不調の報道資料

長引く症状について、海外では研究も始まっています。フランスの病院（レンヌ大学病院）が行ったアプリによる調査では、この病院で診察を受けた感染者 400 人のうち、10～15%の人にコロナ感染症による長引く体調不良が見られたということです。症状は咳、頭痛、胸の痛み、重度の疲労感、息苦しさなど多岐に渡ります。

新型コロナの元感染者たちのもう一つの悩みは心の問題です。パート先で新型コロナウイルスに感染した 40 代の女性。4 月初めに同僚が感染し、濃厚接触者だった女性も 1 週間後に発症しました。症状が軽く、ホテルに入所しましたが、なぜか後ろめたさを感じたといいます。ホテル療養だったため、一定期間を過ぎ、みなし陰性として検査なしで自宅に戻りました。はっきりと治った確証がないまま社会復帰していいものか、女性は 1 人悩みました。発症から 2 ヶ月たち、医師から他人に感染させる心配はないと告げられていますし、仕事も再開しましたが、感染の事実は絶対に知られたくないと話します。

長い時間がたっても続く元感染者達の葛藤。皆さんどう感じましたか？

字幕：「元感染者が抱える悩み——長引く体調不良 なぜか感じる”後ろめたさ”」

司会：退院した後も、体や心に長い間影響が続くという実態。改めてこのウイルスによる感染症の怖さを感じます。まずこの長引く体調不良。私たちの番組にも多くの声が寄せられています。沖縄県立中部病院感染症内科の医師で、厚生労働省の参与としてアドバイザーも務めていらっしゃる高山さん。長引く体調不良、実際に目にされますか。

高山さん：すっかり良くなる人の方が多いですが、いわゆる風邪と比べると退院後の体調不良を訴える方が多いという印象持っています。私の病院の経験でいうと、2 割くらいの方が何らかの症状が数週間続き、中には 1 ヶ月経過しても臭いが戻らない、倦怠感が続くということをおっしゃる方がいます。

字幕：「2 ヶ月以上続く症状——咳、頭痛、胸の痛み、重度の疲労、息苦しさ・・・」

司会：こうした長引く体調不良とウイルスでの関連性をどのように考えられていますか。

高山さん：まだわかっていないことが多いですけど、大きく分けると 4 つ考えられると思います。

字幕：「長引く体調不良の原因——臓器障害（肺の損傷）、長い入院による体力低下、心理的・社会的ストレス、ウイルスが持続感染？」

石井光太 さん（現場取材「独自の目線で社会を斬る」）：このコロナの怖さは、その後の体調不良が続くということだけではなく、例えば会社がコロナで休みで、お給料がないにも関わらず仕事ができないとか、大切な人に会えないとか、あるいはどこに行っても病歴を聞かれて差別された気持ちになるということ。つまりコロナが起こす社会問題と体調不良が合わさって、二重三重の苦しみに陥っているのではないかと思っています。大切な人を傷つけないという気持ちは揺るがないものだと思いますので、その部分であれば私達は必ず団結できるはずで、団結して一つの方向に向かうことが、最終的にコロナを克服することになるのではないかと思っています。

※番組の説明は下記からご覧頂けます。

<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4433/index.html>

20.6.22news zero でコロナ“後遺症”について放送

6月22日(月)に日本テレビの『news zero』で、「10代、20代でも続くコロナ“後遺症” 陰性後も倦怠感や頭痛」と題して、COVID-19後の体調不良について取り上げられました。

新型コロナウイルスに感染していたという10代、20代の男性は、すでに陰性が確認されているにもかかわらず、倦怠感、頭痛、胸の痛みなど、「後遺症」ともいえる症状に苦しんでいるといいます。

千葉県の大学生 (21)

陰性確認後も症状に苦しむ大学生(21)は、「『陰性が出てからも治らない』とは思いませんでした。」現在の症状は37.5℃前後の熱と頭痛、倦怠感と湿疹、嗅覚障害があり、今も食欲がなく、頭痛がひどく眠れない日もあります。

3月27日に目が充血するなどの症状が出て、4月1日には37.8℃の発熱。6日にPCR検査を受け、7日に陽性が確認されました。夜は40.5℃の熱と肺の激痛と呼吸困難、嗅覚障害、味覚障害などで、死ぬかと思ったそうです。そうした状況で自宅療養を続けていましたが、症状が続いたため4月29日に入院。5月に2回陰性が確認され、9日に退院しましたが、40日以上がたった今も体調の波に襲われています。

医師が書いた診断書には、「その後も微熱、倦怠感、咳嗽等の症状が持続しており、自宅療養が望ましい」と書かれ、現在は休学して療養しています。「20分程度の散歩も“息切れが激しく”休みながら。誰かに押しつけられてベッドから出られないような倦怠感のときも。」陰性になったあとも、苦しんでいる人がいることを心の底に置いてもらおうと、少しは危機感が高まるのかなと思いますと語ります。

千葉県の10代の男性

陰性確認後も症状に苦しむ男性は、常に頭痛と全身のだるさ、倦怠感、肺や胸の痛みも続いています。陰性になってからすでに40日ほどですが、「本当にきついです。常に『はあはあ』して“息苦しさ”があるので、少し歩くだけで疲れます。」

6月22日夕方の体温は38.3℃。「“社会復帰できるか”の不安が一番大きいです。時間や日によって体調が大きく変化し、登校や勉強するにも非常に厳しい状況です。」人混みに出れば『再び感染するのは』という恐怖も。

「(感染)初期の状態は思い出したくないくらい苦しかったので『もう一度それにかかるのが不安』というか“恐怖”です。みなさんに少しでも予防と注意をしていただきたいと思います」

20.7.7 毎日新聞に新型コロナ「後遺症」の記事

7月7日付けの毎日新聞に、「『健康とはほど遠い』 陰性になっても続く倦怠感と嗅覚障害 新型コロナ『後遺症』」と題して、新型コロナウイルスの「後遺症」について取り上げられました。新型コロナの「後遺症」はまだ明確になっていませんが、警鐘を鳴らす学会や医師も出てきています。

千葉県男性（21）は4月1日に発症。高熱の他に下痢や嘔吐、血痰症状も加わり、近くの内科を受診し7日にPCR陽性との連絡を行けました。保健所からは「3～4日以内に入院できる」と言われましたが、入院できたのは、連絡から22日後の29日でした。CT検査を受け、肺炎と診断され、入院中には手足に湿疹も出ました。PCR検査で2回陰性判定となったため、5月9日には退院しました。

退院日にも37.5度の熱があり、退院後も発熱、倦怠感や頭痛、嗅覚障害も続き、買い物に行かずに、3日連続食事できない時もありました。血液検査で脱水症状を指摘され、再入院したことも。医師から「家族の助けなしでは生活できない」と言われ、実家に戻りました。「大学では5月半ばからオンライン講義が開始されていたが、試験勉強をするなどはとても無理」と大学の休学も決めました。

実家に戻ってからも、発熱、倦怠感や頭痛、湿疹などの症状は続き、「健康とはほど遠い」といいます。近くの病院を受診しましたが痛み止めが処方されただけで、男性は「いまだ社会復帰できておらず、ずっと続く症状の原因が分からないのが怖い。陰性になっても症状が続く人がいることを知ってほしい」と話しています。

新型コロナに感染すると、全身に血栓が発生することが明らかとなっており、新型コロナの後遺症の可能性を指摘している大阪市の太融寺町谷口医院院長は、「正確な作用機序は分かっていないものの、肺から侵入したウイルスが血中に入るとさまざまな臓器の細胞の表面に発現しているACE2受容体に結合することは確実で、ACE2受容体が存在する血管内皮細胞にウイルスが侵入して起こった血管内皮細胞炎と関係があるのかもしれない」といいます。

また、「新型コロナは、血栓が身体のさまざまな組織に影響を与えること、血管内皮細胞炎が起こり全身に影響が及ぶこと、さらに、重症化すると免疫系のさまざまな物質が嵐のように吹き荒れて（サイトカインストーム）、多臓器が障害されることなどから、重症化すれば単なる風邪とはまったく異なる」と話しました。

医療法人社団広士会理事長によると、運営する東京都内のクリニックに、「37度前後の微熱がずっと続く」「胸が苦しい」「倦怠感がある」などと訴える患者が、4月から5月末までに約180人来院。うち、5人は感染確認後に陰性となった患者でした。

同理事長は、患者の75%が1カ月以上症状に悩まされていますが、病院の血液検査では異常がないことから、医師が精神的なものではないかと診断するケースがあり、「ショックを受けている患者も多く、安易に精神的なものと医療従事者が決めつけることに警鐘を鳴らしたい」と話しています。

日本血栓止血学会は新型コロナの感染で、血管に炎症を起こし血栓症を発症する可能性を指摘しており、特に重症者で血栓症を発症する頻度が高く、全身症状を悪化させる因子となっているといいます。厚生労働省の「新型コロナウイルス感染症診療の手引き」には「後遺症」に関する記載はありませんが、同省担当者は「今後も情報収集を続け、必要であれば手引きに掲載していく」としています。

※記事の一部は下記からご覧頂けます。

<https://mainichi.jp/articles/20200707/k00/00m/040/106000c>

20.7.2 NHK ニュースで COVID-19 後の体調不良

7月2日(木)の19時と21時のNHKニュースで、「退院後もコロナ後遺症」と題して、COVID-19後の体調不良について取り上げられました。新型コロナウイルスに感染し、陰性になった後も、発熱や息苦しさが続いていると訴える人が相次いでおり、実態調査が始まることになりました。

21歳の男子大学生は、退院した後も後遺症と見られる症状を訴えています。4月に感染が判明し、40度を超える発熱などで入院。5月9日に陰性が確認されて退院しましたが、37度5分前後の発熱や、倦怠感、息切れ、嗅覚障害などの症状が2ヶ月近く続いています。今は休学を余儀なくされています。

大学生：すごい倦怠感で押しつぶされそうな感覚で、眠れないくらいの頭痛もありました。字を書くだけでも疲れる状況で、集中して聞くことは難しいと思いました。なぜ熱が出ているのか、症状がいつまで続くかが分からないので怖いと思います。

SNS上には、後遺症と見られる症状に苦しむ人達の声が続いています。

声：「めまいも鳴りも治らん。本気で後遺症なのではという気がしてきた」「コロナ後遺症があります。自分も微熱が60日続いています」「医者から一生治らないかもといわれた」

NHKは、早くからこうした症状の存在に注目し、東京都内18か所の医療施設に調査を依頼。5月末までで陰性と確認されたおよそ1370人の内、少なくとも98人が、呼吸機能や運動能力の低下などで、生活に支障を抱えていることが分かりました。

後遺症と見られる症状には、医療費の負担も重くのしかかり、この大学生は今も続く症状の治療に、これまでに12万円以上かかっています。陰性と確認され退院できるまでの医療費は全額公費負担ですが、その後は通常の医療費として一部が自己負担になるからです。

後遺症と見られる症状について、日本呼吸器学会が実態調査に乗り出します。学会の医師が所属している全国の医療機関に協力を仰ぎ、肺機能の低下を中心に症例の調査や研究を進めるということで、調査は早ければ来月にも始まる見通しです。

日本呼吸器学会理事長の横山彰仁氏：日本でそのような方がどのくらいいるのか等は、全く分かっていない。どのくらいの頻度でどういう人にこういった後遺症が出るのか、早く第二波に備えて、データをきちんと整備しておくことが重要だと思います。

※詳しくは下記からご覧頂けます。

https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200702/k10012492951000.html?fbclid=IwAR0pDKhSkZJH0pLac65uhPSY8hvbF-MVFdwWABdIXNDu74RVUtezgwqi_os

20.6.24 NHK クローズアップ現代+で COVID-19 後の体調不良

6月24日(水)にNHKテレビの『クローズアップ現代+』で、「新型コロナ 元感染者たちの告白」と題して、COVID-19後の体調不良などについて取り上げられました。

司会：日本で感染した人は18000人あまり。その多くがウイルスを克服し、回復したと言われていきます。元感染者の人たちは今どう過ごしているのか。体験談を募集（「感染者の経験を今後に活かしていくために、新型コロナウイルスに感染した方の体験、意見を募集しています」）すると、長引く体調不良に苦しんでいるとの声がいくつも寄せられました。

元感染者の声：「3月の三連休に感染し、未だに闘病中です」「微熱、頭痛、関節痛など様々な症状が1ヵ月半以上続いています」

字幕：「熱が続いています」「味覚嗅覚の異常が治らない」「コロナの後遺症に悩まされています」「職場復帰はできていません」

司会：これまであまり語られることのなかった元感染者たちの肉声。回復後どんな人生を歩んでいるのでしょうか。誰もが罹患する可能性のある新型コロナウイルス。いち早く感染を経験した人の声に耳を傾けることで、ウイルスとどう共生していくべきか考えます。

元感染者が語る悩み。1つ目は症状がなかなか治らず、体調不良が長引くケースです。4月に新型コロナウイルス感染が判明した大学生(21)。PCR検査は陰性になってから2ヶ月以上経ちますが、今も体調がすぐれないといいます。3月から自宅で自粛していましたが、アルバイトのため、一度だけ電車で外出。5日後に発熱しPCR検査で陽性となりました。

大学生(21)：37度7分あり、少し高めですね。熱があると不安な気持ちにはなります。例えるならインフルエンザの10倍以上の辛さと、肋骨が骨折したくらいもがいて、寝返るたびに激痛が胸に走って。

その後一向に熱が下がらず、手のひらには湿疹が。症状は全く改善されませんでした。1ヵ月後にPCR検査を行うと2回連続で陰性に。体内にはもうウイルスがいないと診断され退院が決定しました。

大学生(21)：体調的には全く変わらなくて、本当に陰性なのかなって疑うレベルでした。

感染から2ヶ月。発熱や頭痛や今も続いています。はっきりした原因は分かりませんが、医師の見立てでは、免疫力全体が落ちているか、長い療養生活による心因性の可能性もあるといいます。大学も休学せざるをえませんでした。

大学生(21)：コロナに感染する前は、2週間ぐらいで治る病気なのかなという認識でいましたけど。

(大学の)オンライン授業を見ることも結構きついし、それを覚えてテストするとなると、今の僕には到底できない。

検査で陰性となった後も長く続く体調不良。番組で体験談を募ったところ、同様の悩みが多く寄せられました。

元感染者の声：「私は3月上旬から現在も微熱が下がらず、全身に様々な症状が出ています。」「発症後50日経つが、味覚嗅覚の異常が治らない」

日本での COVID-19 後の不調の報道資料

長引く症状について、海外では研究も始まっています。フランスの病院（レンヌ大学病院）が行ったアプリによる調査では、この病院で診察を受けた感染者 400 人のうち、10～15%の人にコロナ感染症による長引く体調不良が見られたということです。症状は咳、頭痛、胸の痛み、重度の疲労感、息苦しさなど多岐に渡ります。

新型コロナの元感染者たちのもう一つの悩みは心の問題です。パート先で新型コロナウイルスに感染した 40 代の女性。4 月初めに同僚が感染し、濃厚接触者だった女性も 1 週間後に発症しました。症状が軽く、ホテルに入所しましたが、なぜか後ろめたさを感じたといいます。ホテル療養だったため、一定期間を過ぎ、みなし陰性として検査なしで自宅に戻りました。はっきりと治った確証がないまま社会復帰していいものか、女性は 1 人悩みました。発症から 2 ヶ月たち、医師から他人に感染させる心配はないと告げられていますし、仕事も再開しましたが、感染の事実は絶対に知られたくないと話します。

長い時間がたっても続く元感染者達の葛藤。皆さんどう感じましたか？

字幕：「元感染者が抱える悩み——長引く体調不良 “なぜか感じる”後ろめたさ”」

司会：退院した後も、体や心に長い間影響が続くという実態。改めてこのウイルスによる感染症の怖さを感じます。まずこの長引く体調不良。私たちの番組にも多くの声が寄せられています。沖縄県立中部病院感染症内科の医師で、厚生労働省の参与としてアドバイザーも務めていらっしゃる高山さん。長引く体調不良、実際に目にされますか。

高山さん：すっかり良くなる人の方が多いですが、いわゆる風邪と比べると退院後の体調不良を訴える方が多いという印象持っています。私の病院の経験でいうと、2 割くらいの方が何らかの症状が数週間続き、中には 1 ヶ月経過しても臭いが戻らない、倦怠感が続くということをおっしゃる方がいます。

字幕：「2 ヶ月以上続く症状——咳、頭痛、胸の痛み、重度の疲労、息苦しさ・・・」

司会：こうした長引く体調不良とウイルスでの関連性をどのように考えられていますか。

高山さん：まだわかっていないことが多いですけれど、大きく分けると 4 つ考えられると思います。

字幕：「長引く体調不良の原因——臓器障害（肺の損傷）、長い入院による体力低下、心理的・社会的ストレス、ウイルスが持続感染？」

石井光太 さん（現場取材「独自の目線で社会を斬る」）：このコロナの怖さは、その後の体調不良が続くということだけではなく、例えば会社がコロナで休みで、お給料がないにも関わらず仕事ができないとか、大切な人に会えないとか、あるいはどこに行っても病歴を聞かれて差別された気持ちになるということ。つまりコロナが起こす社会問題と体調不良が合わさって、二重三重の苦しみに陥っているのではないかと思っています。大切な人を傷つけないという気持ちは揺るがないものだと思いますので、その部分であれば私達は必ず団結できるはずで、団結して一つの方向に向かうことが、最終的にコロナを克服することになるのではないかと思っています。

※番組の説明は下記からご覧頂けます。

<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4433/index.html>

日本での COVID-19 後の不調の報道資料

20.6.22 news zero でコロナ“後遺症”について放送

6月22日(月)に日本テレビの『news zero』で、「10代、20代でも続くコロナ“後遺症” 陰性後も倦怠感や頭痛」と題して、COVID-19後の体調不良について取り上げられました。

新型コロナウイルスに感染していたという10代、20代の男性は、すでに陰性が確認されているにもかかわらず、倦怠感、頭痛、胸の痛みなど、「後遺症」ともいえる症状に苦しんでいるといいます。

千葉県の大学生 (21)

陰性確認後も症状に苦しむ大学生(21)は、「『陰性が出てからも治らない』とは思いませんでした。」現在の症状は37.5℃前後の熱と頭痛、倦怠感と湿疹、嗅覚障害があり、今も食欲がなく、頭痛がひどく眠れない日もあります。

3月27日に目が充血するなどの症状が出て、4月1日には37.8℃の発熱。6日にPCR検査を受け、7日に陽性が確認されました。夜は40.5℃の熱と肺の激痛と呼吸困難、嗅覚障害、味覚障害などで、死ぬかと思ったそうです。そうした状況で自宅療養を続けていましたが、症状が続いたため4月29日に入院。5月に2回陰性が確認され、9日に退院しましたが、40日以上がたった今も体調の波に襲われています。

医師が書いた診断書には、「その後も微熱、倦怠感、咳嗽等の症状が持続しており、自宅療養が望ましい」と書かれ、現在は休学して療養しています。「20分程度の散歩も“息切れが激しく”休みながら。誰かに押しつけられてベッドから出られないような倦怠感のときも。」陰性になったあとも、苦しんでいる人がいることを心の底に置いてもらおうと、少しは危機感が高まるのかなと思いますと語ります。

千葉県の10代の男性

陰性確認後も症状に苦しむ男性は、常に頭痛と全身のだるさ、倦怠感、肺や胸の痛みも続いています。陰性になってからすでに40日ほどですが、「本当にきついです。常に『はあはあ』して“息苦しさ”があるので、少し歩くだけで疲れます。」

6月22日夕方の体温は38.3℃。「“社会復帰できるか”の不安が一番大きいです。時間や日によって体調が大きく変化し、登校や勉強するにも非常に厳しい状況です。」人混みに出れば『再び感染するのは』という恐怖も。

「(感染)初期の状態は思い出したくないくらい苦しかったので『もう一度それにかかるのが不安』というか“恐怖”です。みなさんに少しでも予防と注意をしていただきたいと思います」